

## 須内泰子作 「孤独の終着駅」

- 須内泰子ナレーション わたしがイエス・キリストを救い主として信じたのは、今からちょうど 5 年前のことです。わたしは 17 歳になるまで、教会というところに行ったこともなく、また、そういった人たちがいるということすら考えもしませんでした。
- ある秋の下校時に、校門のところで、2、3人の男の人たちがパンフレットのようなものを配っていました。
- 教会員1 勉強、お疲れさん、
- 教会員2 キリスト教の集会です。どうぞお読みください。
- 教会員3 どうぞいらしてください。待ってますよ！
- ナレーション 読んでみると、「高校生の集い」というのが近くの教会で催されるようでした。私は友人を誘いましたが、だれも行きたがりません。それでもわたしは、一人で教会に行くことにしました。わたしには何か心を引くものがあったのです。
- 効果音 (ブリッジ)
- ナレーション わたしは、中学1年生の時に、母をがんで亡くしておりました。それから3年余り歳月が過ぎておりましたが、わたしは家庭のことで悩んでいたのです。それと言いますのは、母が死んでからずいぶんたつというのに、父が母のことで悲しんでいたからです。お酒を以前にも増して飲むようになり、独りで悲しみの淵に沈んでいく父の姿は、言い知れない寂しいものがあります。父は夜中になっても寝ることをせず、おぜんの前で、肩を落として母の名を呼ぶのです。
- 父 照子！ すまなかった。赦<sup>ゆる</sup>してくれ。照子、照子！
- ナレーション わたしは、自分は母親の代わりであることを強く意識しなければなりませんでした。なぜなら、年若いわたしは、そう思い込むことによって、やりたいことをあきらめ、やりたくない多くの事柄を自分に強制していたからです。学校が引けると家に早く帰って家事をし、できるだけ家にいるよう努めたのです。けれども、わたしのこうした工夫に、家の者はだれも気づいてくれませんでした。
- 中学3年のころ、わたしは、自分が母に代わることのできない、いな、父の悲しみをぬぐうことのできない者であることを知ったのです。
- 泰子(モノローグ) わたしには何もできない。わたしは子供でしかなかったんだ。父さんは母さんのことだけを思って「悲しい、悲しい」と言ってのめり込んでいってしまう。いつも母さんのほうばかりを向いてしまう。わたしはどうしたらいいの、父さん？ わたしは父さんのなんなの？ 父さん、父さん！
- ナレーション わたしのこんな気持ちは、いつしか自己中心な思い、“もっと自分のことを考えてほしい”という思いに変わっていきました。
- 泰子(モノローグ) 父さんにはわたしたちがいるのに、どうしてわたしたちに背を向けてしまうのかしら。そんなに母さんに悪いと思っているなら、生きている時にもっと優しくしておけばよかったんだわ。母さんはいつだって生傷を作っていたじゃないの。
- ナレーション わたしはこの事態を、どういう風に処理したらいいのか一生懸命に考えながら、いつも母のことを思い浮かべるのでした。

泰子(モノローグ) こんなとき、母さんならどうするだろうか？ 父さんに文句を言うのかしら。いや、違う。母さんはいつも黙っていた。

ナレーション けれども、毎日毎日そう思いつめていくうちに、わたしの父に対する気持ちは、いつしか憎しみに変わっていきました。

泰子(モノローグ) 母さんのことも、そして父さんが二人の間に生まれてきたわたしたち5人のことで悩むのも、みんな身から出たサビだ！ どうしてわたしがこんなに独りで苦しみ続けなければいけないんだ？ もうイヤだ。わたしをこんなにする父さんなんていなければいい。わたしはなぜこんな男を“父”と呼ばなければいけないんだろう？ どうして、どうしてわたしはこの人の子供なんだ？！

ナレーション とりとめもなく父を責める思いが浮かんでは消え、消えてはまたこみ上げてくるのです。けれどもそんなことは、いちいち人に言って聞かせるわけにはいかなかったのです。いいえ、兄弟にさえ聞くことはできませんでした。兄弟もまた悩んでいたからです。みんなが悲しんでいて、それぞれ自分の内にこもっていたのです。そのことを考えると、母がそうしていたように、わたしは口の辺りまで出てくるつぶやきをのみ込むほかはありませんでした。今にして思うと、家の中には、真の解決者がいなかったのです。わたしは本当に疲れ切っていました。そして、たまらないほど孤独でした。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション ちょうどそのころでした、わたしが教会のパンフレットを手にしたのは。わたしが教会に行くと聞いて、友達は口々に冷やかすのでした。

友人1 どうして教会なんかに行くんだい？

友人2 どう？ 行くようになったらテストで満点取れた？

ナレーション わたしは見えっ張りでしたので、こう聞かれたりすると、「絵画をよく知るためだ」と答えておりました。レンブラントが好きで、彼の絵に描かれている聖書の中の人物を知って、もっと深く鑑賞したかったのです。ですから、こう答えたのはウソではなかったのですけれど、それは、わたしが本当に求めていたもののカモフラージュでした。

一週、また一週、わたしは日曜日を待ちかねたように教会に通いました。通い続けていくうちに、わたしが本当に必要なものに、神様は少しずつ気づかせてくださいました。心の片隅にあった問題、人には話せないこと、そしてわたしが知りたかった本当の姿——。わたしは本当は寂しかったのです。愛に飢え渴いていたのです。人には隠せても神様はご存じでした。そして、そんな自分を偽っていたことに気づかされたのです。わたしは愛を求め、それが得られぬ寂しさとむなしさを、父への憎しみに変えました。けれども、キリストの十字架の光の下で心の中を照らし出された時、それは、自らのうちにはひとかけらもないものを他人から得ようとし、それを与えることのできない他人を責めては、自分を正しいとする醜い自我の姿でした。聖書はそれを“罪”と呼ぶのです。わたしは自分自身に絶望しました。その時に、わたしの耳にイエス・キリストの言葉が静かに響いてきたのです。

聖書 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。(ヨハネの手紙第一 4:10)

泰子(モノローグ) イエス様は、わたしのありのままを受け入れてくださる！ わたしのために、こんなわたしのために命を捨ててくださった…。ここに愛がある！

ナレーション わたしは、イエス・キリストを救い主として受け入れ、長い間の魂のさすらいに終止符を打ち

ました。高校2年になったばかりの、そう、よみがえりのイエス様の命に、すべてのものが新しい息吹に<sup>も</sup>萌えていた春、4月のことでした。

<完>